

第8回ヘルスリサーチワークショップ オープン参加者公募

本年1月に第7回を開催し、関係各方面から高い評価を頂いているヘルスリサーチワークショップ（詳細は当財団機関誌「ヘルスリサーチニュース vol 57（2011年4月号）」をご覧くださいー当財団ホームページからご覧になれます）の第8回を、以下の要領で開催致します。

約40名の参加者は、第7回参加者からの招待枠、新規推薦枠、及びオープン参加枠（公募）で構成されますが、今回、下記のとおりオープン参加者（公募による参加者）を公募致します。

新たな「“出会い”と“学び”」の2日間にご期待下さい。



第8回ヘルスリサーチワークショップ

テ ー マ： ヘルスリサーチは何を創造できるか
ー 20年後の持続可能な社会に向けて ー

開 催 日： 平成24年1月28日（土）・29日（日）

開催場所： アポロラーニングセンター
（ファイザー株式会社研修施設：東京都大田区）＜予定＞
参加者には追って詳細をご案内いたします

参加者： 約40名

公 募 要 項

参加費・宿泊費無料

オープン参加枠：6～7名程度

参加要件： 下記分野の将来性ある若手研究者またはヘルスリサーチに関心ある実務担当者（年齢は不問）。
共通言語は日本語（国籍は不問）。尚、動機書の提出と推薦者が必要です。

1. ヘルスリサーチ分野

経済学者、統計学者、経営学者、社会学者、心理学者、人類学者、哲学者、教育学者、
法学者、倫理学者、医療疫学者、保健学者、医療マネジメント学者、医療情報学者、
医療政策学者、医療システム学者、ゲノム医学者、など

2. 保健医療福祉分野

医師、歯科医師、看護師、保健師、薬剤師、ケアマネジャー、カウンセラー、理学療法士、
作業療法士、介護福祉士、社会福祉士、ケースワーカー、ソーシャルワーカー、栄養士、など

3. 行政分野

保健医療政策の立案担当者、保健医療政策の実施担当者、など

申込期間： 平成23年6月20日（月）～7月29日（金）＜当財団事務局必着＞

選出方法： 申込者多数の場合は、幹事・世話人会にて選出。

選出結果は平成23年9月下旬に本人に通知。

申込方法： 財団所定の申請書式（当財団ホームページから申込書をダウンロード）に必要事項をパソコン
入力の上、当財団事務局へ、郵便でお送り頂くと同時に、E-mailにWordファイルを添付して
当財団メールアドレスへお送り下さい。

公益財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団

〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7新宿文化クイントビル

Tel : 03-5309-6712 Fax : 03-5309-9882

E-mail : hr.zaidan@pfizer.com

URL : <http://www.pfizer-zaidan.jp>

第8回ヘルスリサーチワークショップ ヘルスリサーチは何を創造できるか

— 20年後の持続可能な社会に向けて —

趣意書

第1回の「赤ひげ」から第7回の「つながり」まで、このワークショップでは様々な角度から保健医療・福祉分野の発展について考えてきた。今回は、ヘルスリサーチそのものをテーマとしたい。

2011年3月11日の東日本大震災は、ヘルスリサーチに対しても大きな課題を突きつけている。過疎に苦しむ地域の被害は、地域格差の問題の深刻さを浮かび上がらせた。原子力発電所事故では、人々の科学技術への信頼が損なわれた一方で、放射線と健康リスクといった科学研究の成果を伝えることの難しさを再認識させた。

20年後の次世代に引き継ぐよりよい社会のために、ヘルスリサーチは何を行うことができるのだろうか？

右肩上がりの成長が見込まれた時代は、実現時期の違いはあれ、多くの選択肢を最終的には実行することができた。結果として、選択肢間の取捨選択を真剣に考える必要はあまりなかった。「今よりも受益が増えるけれども負担は増えない」といった選択肢は、導入についての議論の余地はない。

しかし現在の社会では、ヒト・モノ・カネが有限であることが明確となり、将来世代にツケを回しすぎれば将来世代の可能性を狭めてしまう。その結果、選択肢の長短をできるだけ多くの視点から比較検討し、優先順位をつけて、ある選択肢についてはあきらめるということが求められる。また、既得権を越えて、今行っていることを止め他の選択肢に資源を振り分けることが必要になることもあるだろう。

ヘルスリサーチには、医学系の分野から、社会・人文科学まで、多様な学問分野の専門家が関わっている。どの分野でもそうであろうが、一つの分野の研究内容や方法論は、研究蓄積の過程で専門家同士での厳しい検討を通して妥当性が高められていく。

個別では十分確立した専門分野の研究者がヘルスリサーチに臨むとき、専門分野の方法論やその背景にある思想の特徴に気づかされ、刺激を受けることも多いのではないだろうか？

様々な専門分野の方法論を利点欠点の双方から比較検討することで、それらの特徴を客観視することができれば、専門性を深めることができる。また、それぞれの分野が融合することで、各々の欠点を補うようなコラボレーションが生まれれば専門性を広げることができる。いずれの場合でも、将来について幅広い視点

幹事



代表幹事 後藤 励



秋山 美紀



小川 寿美子



金村 政輝



を持って探求することにつながっていく。このようなことは、多分野の研究者があつまる本ワークショップだからこそできるのではないだろうか。

もちろん、ヘルスリサーチは研究者のみが関わるわけではない。研究そのものには全く興味がない普通の人々をも巻き込んでいく。研究段階では調査対象として関わることもあるだろう。また、研究結果が技術や制度の形で実現したときには消費者として、社会保障制度や研究体制を金銭的に支えるという面からは納税者としての関わりを持つ。

保健医療・福祉システムの中で、研究者と人々をつなぐ役割は、保健・医療・福祉の現場従事者、政府や行政の担当者、メディア関係者等、様々な立場の人が担うことになるだろう。研究者が、各分野の方法論の限界を理解し、冷静に研究結果を提示したとしても、社会システムの中で研究結果がひとり歩きしていくことは珍しくない。研究者の側が、そうした社会の営みを「非科学的」といって批判することは容易である。

しかし、ヘルスリサーチの目的は研究そのものではなく、保健医療・福祉制度システムを通じたよりよい社会の実現である。科学的な合理性が現実の意思決定と乖離することも多い。科学的には間違っているが、人間関係やそれまでの経過から考えると正しい、といった状況にどう対処していくか。ヘルスリサーチをどのように行い、どのように伝え、どのように制度設計に活かしていくか。こうした問題は、研究者と現場の実務担当者とが共同して考える必要があるだろう。

ヘルスリサーチそのものをテーマとするといっても、決して大上段に構えているわけではない。研究に携わる方であれば自分の過去や現在の研究を振り返り、実務担当者の方であれば現場で感じる研究に関する素朴な疑問をワークショップに持ち寄ってみてはどうだろうか。本ワークショップでは、ヘルスリサーチに直接的或いは間接的に関わりを持つ人すべてがヘルスリサーチの可能性について、ヘルスリサーチの目指すべきもの、研究の方法論、研究と社会との関係性など様々な角度から議論する場としていきたい。

第8回ヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人一同

世話人



猪飼 宏



石田 直子



當山 紀子



山崎 祥光



豊沢 泰人

幹事・世話人からのメッセージ

代表幹事 後藤 励

甲南大学経済学部 准教授

勤務している大学の収入の8割は、学生やその保護者からの納付金です。そのほか、研究費として、公的・民間様々な資金を使っています。このように私は、医療経済学の専門家として社会から養われています。もちろん、専門分野以外の学問、保健・医療・福祉分野に携わる多くのプロフェッショナルに対する配慮が足りないのは問題があるでしょう。専門家としての頑固さと、専門以外の多くのことに対する配慮をどうバランスすれば、20年後の社会に役立つことができるのでしょうか？今年も、多くのみなさまとお話しさせていただきたいと思っています。

幹事 秋山 美紀

慶應義塾大学総合政策学部 准教授

社会の問題を見定めるには異なる視点や視野の検討が重要で、問題解決には多領域の人の協働が不可欠だと考えています。私自身ヘルスリサーチャーに求められているのは、「ダイナミックに“バランス”をとる力」だと思っています。過去の蓄積と未来の創造のバランス、理論と実践のバランス、基礎体力と柔軟性のバランス、ミクロ視点とマクロ視点、内的妥当性と外的妥当性、クールさと暖かさ……、こうしたバランスをダイナミックに取ってアプローチする必要があると感じています。今年も皆さんとの刺激的な議論を楽しみにしています。

幹事 小川 寿美子

名桜大学人間健康学部 教授

近年の医療の細分化に伴い、「病を診るな、人をみよ」という言葉の重要性を痛切に感じる。ヘルスリサーチは、その“人”のみならず人間同士の“つながり”や“環境”といった「周辺をみる」視点とそれらの関連性を追究する。故にヘルスリサーチは、その大局的な視点によって、単なる科学的根拠に基づく医療だけでは到達できなかった、次世代も望む持続的社会的あり方、人が幸せとを感じるような仕組みづくりへの効果的アプローチの可能性を秘めていると思えてならない。今年も参加者との語らいを通じた刺激と創造の醸成を楽しみにしている。

幹事 金村 政輝

東北大学病院 総合診療部 講師

東日本大震災で多くの方々が命を落としました。そして今もなお先の見えない避難生活を強いられている多くの方々がいます。これからどのようなビジョンを描き、どう実現させていくのが将来を決定するといっても過言ではありません。震災は被災地以外にも大きな影響を与えており、私たちひとりひとりが今後どのような社会にしていきたいのかが問われています。次世代に引き継ぐよりよい社会のためにヘルスリサーチに何ができるのか。実務従事者、様々な分野の研究者など多彩な方々が集うこのワークショップでの熱い議論を期待しています。

世話人 猪飼 宏

京都大学大学院 医学研究科 医療経済学分野 助教

研究者は信念をもとに主題を決め、仮説を入手可能なデータで検証して論文を書くが、それが社会にもたらした成果を知ることは容易ではない。実務家は将来を見据えた日々の決断に備え、過去の研究からデータを探すものの、答えが常に見つかるとは限らず、かつ研究の過程や制約を十分に理解するのは容易ではない。自らの老後を、子供達の未来を、どのようにデザインし、その過程でヘルスリサーチは何を検証し、どこを目指すのか？リサーチを作る人も使う人も交えて大いに語り、悩むことでより良い未来への手掛かりを得られたらいいですね。

世話人 石田 直子

インディペンデント・エディター

一世代後、2030年代の日本はどうなっているでしょう？3.11以降、私たちを取り巻く状況と価値観は確実に変化しています。この壮大なパラダイムシフトを、なんとか乗り切り、現実に対応していきたいものです。ターニングポイントの今、私たちにできることは何でしょうか？次世代へバトンを渡すために、実社会の中で、ヘルスリサーチはどんな役割を担えるのでしょうか？今後のヴィジョンを様々な立場から考え、融合し、行動に変容していくことを願っています。さあ、未来を変える、白熱の議論をいたしましょう。

世話人 當山 紀子

東京大学大学院医学系研究科 博士課程

まず初めに、東日本大震災で被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。この度の震災に直面して、阪神・淡路大震災の経験を思い出しました。地震の多い日本で、震災は避けられないと知りながら、震災が起こったときにどうしたら良いか、私自身の準備不足を改めて実感し、悔やみました。同時に、自分の身の回りから始めて、今後地域全体としてどのように備えたらよいのだろうか？ということを考え始めました。今回のワークショップでは、20年後の持続可能な社会に向けて、ヘルスリサーチの可能性について語り合えることを期待しています。

世話人 山崎 祥光

井上法律事務所 弁護士

ヘルスリサーチに関する問題として、「個人の選択」の尊重と制度目的の達成のバランスがあります。まず、個人が科学的にも妥当な選択ができるよう、専門家と非専門家の「つなぎ」の役割がますます重要になっています。何をどうやって伝えれば、行動選択に必要な「リテラシー」が伝わるのか。次に、制度目的達成の見地から、個人の選択と制度的強制をどのように組み合わせることが倫理的かつ合理的なのか（ワクチン行政や感染隔離など）。初めての世話人です。みなさんの議論の場をサポートするとともに、自分も学べばと考えております。

世話人 豊沢 泰人

ファイザー株式会社コーポレートアフェアーズ統括部長

3.11の災害時、震ヶ関で医薬品安全性会議の最中でした。震ヶ関の天井も落ちたりして会議は中止され、皆さん携帯で状況の確認に追われていたのが昨日のようです。業界の災害対策本部として被災地の医薬品供給に追われ、故郷の悲惨な状況に将来の事を考える余裕も失っていました。あれから早いもので3ヶ月が過ぎます。HRWの開催時には10ヶ月を数え、また冬将軍が故郷に訪れていることでしょうか。今回のHRWでは、時間軸、空間軸を探りながら、安心・安全で健康な社会に資する内容が語られる事を期待して、楽しみにしています。